参考資料２

生物多様性の総合評価　指標の評価の基準(案)

指標については、以下の基準を考慮して選定することが望ましい。

1. **生物多様性に関連があること**：指標は、生物多様性の状況を表すカギとなる事項（影響（SI））を明瞭に表していること。状況（SI）を表す指標の選定が困難な場合は負荷（DP）、対策（R）といった原因―結果の関係が関連付けられるような情報であること。

2. **政策的に妥当であり意味があること**：（可能であれば）ベースラインと合意された政策目標に関連して生物多様性の状況（または負荷、対策、利用、キャパシティ）の変化を評価できるものであること。そのことで明確なメッセージを送り、政策や管理の意思決定に適した情報を提供できる。

3. **受け入れられやすく明瞭であること**：「指標」がどれくらい力を発揮するのかは一般に広く受け入れられるか否かにかかっている。政策決定者、主要な利害関係者が理解できるような明瞭なものであることが望ましい。また、代表性や集約性があるとよい。

4. **定期的にデータが収集されること**：指標は定期的に収集されるようなデータを利用すること（たとえば持続可能なモニタリングシステムにより収集されるものなど）。収集されるデータは明確に定義され、検証可能で科学的に容認できるものであること。

5. **時間的・空間的に比較が可能であること**：指標は時系列的な傾向を示すものであること。経年変化などのデータが難しい場合は地域間比較、国別比較などができるものであるとよい。

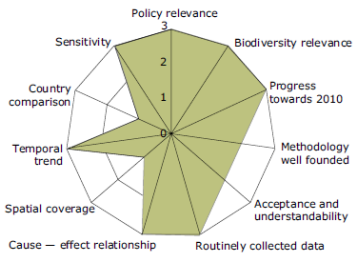
6. **方法論が確立されたものであること**：方法論は明白で分かりやすく、比較的単純であること。指標は正確でかつ無理のない範囲のもので、データは、正確で精密な標準的手法で収集されるものであること。

7. **指標の範囲が日本全体を表していること**：指標の範囲は日本全体をカバーするか、あるいは日本のある生態系全体の傾向を表すものであるとよい。

8. **変化に対する感度を備えていること**：指標は生物多様性の変化の傾向を示すことのできるもので、人為的な変化と自然的な変化を区別できるようなものであること。

9. **2010 年目標にむけたものであること**：指標は 2010 年目標にむけた達成状況を明確に表現できるものであること。

指標選定の基準を設ける趣旨

フレームワークにおける因果関係の想定の不完全さ、指標性の判断の難しさ、データの制約などから、指標自体の良否についての評価を併せて示し、評価全体の正当性を確保した方がよいと考えられる。

＜右図＞：SEBI による指標の評価